

幕末維新の薩摩 — 篤姫から龍馬伝へ —

The Satsuma clan in the late Tokugawa Era — Atsuhime & Ryoma in NHK TV Drama —

原口 泉 (鹿児島大学)

Izumi Haraguchi (Kagoshima University)

テーマに関わる著書二冊の「はじめに」を抄録して、講演概要とさせていただきます。

はじめに—激動の幕末を生き抜いた篤姫
(『篤姫 わたくしこと一命にかけ』、グラフ社、2008年1月)

天璋院篤姫、四十七年の生涯とは

私の愛する鹿児島発の大河ドラマが、また、放映されることになりました。

ドラマの題名は、ヒロインの名から『篤姫』。宮尾登美子さんの名作『天璋院篤姫』を原作に、田渕久美子さんが脚本を書きました。主役はもちろんですが、原作も脚本も女性という、これほど女性づくしのドラマも珍しいでしょう。収録が進むにつれスタジオも熱気むんむんで、前回に優る名作ドラマが誕生しそうです。

本土最南端の薩摩の地で、桜島の噴煙を見ながら錦江湾で遊ぶ純朴で活発な一少女が、いきなり將軍の正室になり、三千人の女性(実質千二百人とも言われますが、いろいろと出入りがありますから、三千人は決して誇張ではありません)がいる大奥を束ねるといふ、ただならぬ人生を歩み始めるのです。

しかも藩主・島津斉彬からは、將軍の世継ぎについての密命を帯びていました。

しかし、この世継ぎ問題が思うにまかせないまま、たった一年半で夫に死なれ、密命と違う後継將軍に嫁いできた天皇の妹・和宮との嫁姑問題で悩みながら、故国・薩摩の軍に攻められる徳川家を守ろうとしました。

その間、やはり自分の身内である天皇家と敵対することになってしまった和宮との関係も、微妙に変化していきます。対立しながらも、共通の敵となってしまったかつての身内(薩軍・官軍)に対して、二人とも必死に徳川家を守ろうとするのです。

その結果、江戸城の無血開城に成功し、和宮はいったん京都へ帰りますが、五年後には東京に戻ります。

その和宮とやっとなりやかな日々を送れるようになった篤姫は、ついに一度も薩摩に帰ることなく、生き延びた徳川家の血筋を守って、後継者を立派に育てることに余生を捧げたのです。

篤姫とはいったい何をした人なのかと簡単に言えば、今挙げた三つのこと、つまり將軍の世継ぎ問題と、江戸城の無血開城、そして徳川家の血筋を守り、後継者を育てたことです。

なぜ今、篤姫なのか

それにしても、なぜ、今、篤姫なのでしょう。

歴史研究者としては、相も変わらず同じような顔ぶれの大河ドラマより、今まであまりスポットの当たっていなかった人物を取り上げてもらうほうが楽しいと思うのですが、それにしても、人気の上でそれほどメジャーとも思えない篤姫が、今、取り上げられることには、それ相応の理由がありそうです。

日本人が失いかけている大事なもの

製作発表のとき、脚本担当の田渕久美子さんはこう書いています。

「この国が混乱を極めていた時代に、最後まで「誇り」と「覚悟」を失わなかった女性、篤姫。」

愛する故郷である薩摩が、そして皮肉にも婚礼の支度役だった西郷が刀を向けてきたとき、実家よりも婚家を守り通そうとしたその姿勢に、日本人が失ってしまった、そして、今の日本人に何よりも必要な「何か」が秘められているのではないかと。

私も歴史研究者として時代考証に関わるうちに、私自身の中にあつた問題意識が、現代という時代の中でさらにはっきりしてくるのを感じました。

私自身のことを言えば、二〇〇七年に還暦を迎えた団塊の世代です。この世代から後は、戦後の民主化の中で育てられ、所帯をもって親になったときはマイホームパパと呼ばれ、子どもとも友だちのように付き合うなど、家の中はまるでまったくプライベートな人間の集まりようになっていました。

しかし、いかに家族といっても、私的な面だけでなく、公的な性格も持っている人間の集団ではないかと、それが、現在の家庭の中では失われかけているのではないかと気になります。

「家」というのはやはり、公的な性格を持った社会を構成する人間集団の最小単位であることは否定できません。

このあたりを、私たち日本人はもう一度考え直す必要があるのではないかと、そして世界の中で日本の「家」はどうあるべきかを考えるきっかけになるのが、このドラマではないかというのが、製作のお手伝いをして改めて感じたことでした。

「一命にかけ」てまで、なぜ「家」を守ろうとしたか

徳川家のように完成された「家」に求められるのは何でしょうか。

完成されたものがたどる運命の一つは衰退と崩壊です。ですから、それに関わる人間に求められるのは、その状況からいかに「家」を守るかということになるでしょう。

その「守り」の中心になるのは当然、その「家」の当主、徳川家で言えば將軍でなくてはならないのは明白です。將軍を中心に幕府の重臣たち、徳川家の直系から、徳川家のゆかりの男たちが、身を挺して「家」を守る責務があります。

ところが幕末期における徳川家の実態を見ると、將軍は非力であり、その補佐役の男たちもあまり頼りになりません。開国を迫る外国の圧力と、倒幕勢力の拡大の中で、多くが右往左往しているだけのようにも思われます。

そのような中で、命をかけて徳川という「家」を守ろうとしたのが、篤姫だったのです。

官軍の攻撃で江戸中が火の海になる寸前、官軍の前線司令官に送った篤姫の嘆願書には、「私事一命にかけ」という言葉が見られます。

徳川家存亡之程もはかりがたくと御先祖様え対し、此上もなき大不幸

—徳川家滅亡の様子も見当がつかず、ご先祖様に対してこれ以上の大きな不幸はなく—

私事一命にかけ是非是非御頼申候事に候。

—私がこの一命にかけ、ぜひぜひお頼みすることです。

戦火迫る中で、私の一命を投げ打ってもこの徳川家を存続させてほしいと、千五百字にも及ぶ手紙を書いているのです。

女の幸せを捧に振って、滅び行く徳川家の最後の守りを果たした篤姫の生き方には、一言では表わせない、何か人間と

して見過ごすことのできない大切なものが秘められているような気がするのです。

歴史を動かした姑・篤姫、嫁・和宮

俗世的な嫁姑問題の側面を持ちながらも、単なる対立関係を超え、歴史を動かすほどの大きな問題を孕んでいるのが、篤姫の物語であり、彼女と和宮の生き方だと思います。

そして、そのテーマに初めて深く切り込んだのが、まさに宮尾登美子さんの『天璋院篤姫』だと思のです。ご自身も、小説のあとがきなどで、この小説を書く動機として、かわいそうな皇女・和宮に対して、意地悪な天璋院篤姫というイメージが定着している風潮に、疑問を感じたことを挙げています。

巷間言われてきた定説に、「何か違うのでは」と疑問を呈する宮尾さんの炯眼も、おそらく一朝一夕に培われたものではないでしょう。

和宮は単に姑にいじめられるだけのかわいそうな嫁だったのか、また一方、篤姫は単に「嫁いびり」のひどい意地悪な姑だったのか、その一面だけでいいのか。そんな思いから、宮尾登美子さんは篤姫を調べ直します。そして、一九八三年二月から四か月にわたって、日本経済新聞の夕刊に『天璋院篤姫』を連載されたわけです。

世継ぎこそ生めなかつたけれど、江戸城の大奥、三千人の女のトップであつただけでなく、徳川三百年の歴史を背負い、日本中の女性の頂点に立った一人の女として、女の人生を人の何倍もの濃さで精一杯生きた、まさに「女ならでは」の底力がそこにはあつたのではないかと。そんな気がしてくるのです。

最後に、勝海舟が篤姫を評した言葉を紹介し、「はじめに」の終わりとします。

「その肝の据わりよう、貞婦というか、烈婦と申そうか、類稀な人でした」
(平成 19 年 12 月)

はじめに(『龍馬の夢を叶えた男 岩崎弥太郎』、KK ベストセラーズ、2010 年 2 月)

四十五年まえの一九六五年七月、私はアメリカ大陸横断鉄道の終点、サンフランシスコに降り立った。そこで帆船・日本丸を見たときは感激で胸がふるえた。中西部ネブラスカ州のハイスクールを卒業して見た、久しぶりの「日本」だったからである。

「この大きな国アメリカと、よく対等にわたりあえる国になったものだ」

そう思いながら、幕末の勝海舟、坂本龍馬、岩崎弥太郎の名が脳裏に浮かんだ。

勝海舟は、咸臨丸に乗って百五十年まえの一九六〇年、太平洋を横断した。その翌年、アメリカでは南北戦争が起こり、綿花飢饉という世界的な経済危機を引き起こす。

龍馬は咸臨丸で帰った勝の門人になり、世界をめざして海援隊を創った。そして、内外の危機を乗り越え、龍馬の夢は、同郷の岩崎弥太郎によって実現する。彼らはまさに日本の危機をチャンスに変えた日本人であつた。

この時代から一世紀半が過ぎ、昨年は長崎・横浜・函館が開港して百五十年であつた。

私は一昨年に引き続き、昨年九月十八日、サンフランシスコにあるルース駐日米国大使の弁護士事務所で開催された第四回日米未来フォーラムで基調報告「島津斉彬と咸臨丸 一幕末維新の知恵」を行ない、長嶺安政総領事、井手祐二鹿児島大学北米教育研究センター長らと交えて、「近代日本の夜明け」と題するパネルディスカッションに参加した。そこで、今後の日米関係のあり方、両国が国際社会で果たす役割、若い世代への期待などについて語り合った。

島津斉彬は、天璋院篤姫の養父で、小松帯刀を抜擢した名君である。小松は斉彬の死後、二十八歳の若さで家老とな

り、勝海舟の海軍操練所が閉鎖されて行き場のなくなった龍馬ら脱藩者二十八名の若者を薩摩に招き、長崎で亀山社中を結成させる。この小松と龍馬のコンビが、薩長同盟を実現させ、大政奉還の大業を成し遂げさせた。

龍馬の亀山社中は土佐藩お墨付きの海援隊となつて、岩崎弥太郎も戦列に加わる一方、小松はイギリス商人・グラバーと組んで日本初の洋式修船所「小菅ドック」を作る。

日本が真の独立国となるためには、航海の自主権を確立し、世界市場に打って出なければならぬ。これが、龍馬と小松、共通の大志だつた。

しかし、龍馬は志半ばで暗殺され、小松も龍馬の跡を追うように病気で他界する。天保六年、同年生まれの二人は、没年三十三歳と三十六歳の若さだつた。

この二人の大志を明治の代に受け継ぎ、大久保利通の引き立てで叶え、さらに拡大したのが一年先輩の岩崎弥太郎だつた。

土佐と薩摩は海に囲まれている、いや日本全体が海洋国家であることを、鎖国日本は忘れていたのだ。その日本の近代化が、薩摩から始まった。

斉彬が一八五一年の藩主就任以来、一八五八年の突然の死まで、執念を燃やした洋式工業移植の試みを、小松や五代友厚、松方正義、三島道庸ら天保六年生まれ組は、十六歳から二十三歳の青春時代に、まのあたりに見て育つた。五年先輩の大久保利通にとつても、二十一歳から二十八歳の青年期であつた。

龍馬も、一八五四年、集成館事業(大砲製造など)を藩命で視察した。土佐の漂民ジョン万次郎に事情聴取した河田小龍から海軍と航海、貿易などについて学んだ。河田の話聞いて、龍馬は手を叩いて喜んでいる。(河田小龍「藤陰略話」『坂本龍馬全集』宮地佐一郎編書)

長崎海軍伝習所のカッテンディーケ士官や勝海舟は、咸臨丸で鹿児島島の斉彬を表敬訪問している。ジョン万次郎は、薩摩藩支配下の琉球に上陸し、十年ぶりに帰国。鹿児島城下では斉彬と酒を酌み交わしながら、アメリカ事情を語りあっている。

こうした島津斉彬―勝海舟―坂本龍馬―小松帯刀―大久保利通―岩崎弥太郎と連なる人間の絆を、私たち現代の日本人は築けるだろうか。

小松帯刀の資金的・組織的庇護下で、大久保と西郷隆盛のコンビが、坂本龍馬を仲立ちにして長州勢とともに倒幕をリードし、竜馬、帯刀、西郷亡き後、大久保が維新を経て岩崎に航海自主権の確立を託したのである。

今またわが日本は危機に瀕している。もはや「経済大国日本」ではない。大国アメリカと中国のG2に挟まれ、その間に漂う弱小国である。

まるで幕末、列強の脅威にさらされていた日本のようではないか。しかし、現代の日本は、幕末において示された「薩摩イニシアティブ」に代る「日本イニシアティブ」を発揮できるのか。

本書では、そうした問題意識から、近代日本の火付け役・坂本龍馬と、その継承拡大を果たした岩崎弥太郎の対照的で個人的な足跡を辿り、とくに日本資本主義の原型ともなる企業集団・三菱の基礎を築いた弥太郎の事績を追って、現代日本が抱える問題への一つのアプローチたらんことを狙ってみた。
(平成 22 年 1 月)

追記

私は今年も 9 月、サンフランシスコで「咸臨丸と近代日本のパイオニアたち」と題する講演をしてまいりました。10 月はブラジルではじめて「坂本龍馬」の講演をいたします。篤姫や龍馬が海外で今どのように評価されているのか―お話させていただきます。